
101回目の殺人

伝次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

101回目の殺人

【Nコード】

N3448P

【作者名】

伝次郎

【あらすじ】

初めてできた恋人、晴美と交際するためには、彼女が所属するあるグループの仕事を全うしない限り、結婚どころかデートさえできないという。そのグループは、殺人集団「キューピットグループ」。ノルマは100人切り。つまり100人の殺人を達成したものだけが、晴美と付き合う権利を得るのである。何も知らずに連れてこられた気の小さい恭史郎は、わけが分からないままグループに属することになった。

前編

「早くしろ、じじい！ 殺されてもいいのか！」

「ま……待ってください。そんな突然言われても……」

ベテランの殺し屋が。シワだらけの顔に拳銃を付き付けて睨みつけた。慣れているとはいえ、その迫力は一般人が見たら腰でも抜かしてしまいそうな怖さが漲っている。

初老の管理人は、震えながら少しずつ後ろへ下がって行った。

「簡単なことじゃないか、そのスイッチを切るだけでいいんだ。自分の命より、子供たちの快樂の方が大事だというのか……。グズグズしていると、その頭に穴が空くことになるんだぞ。 さあ、早くしろ！」

「でも、今日は五月五日の子供の日だし、このジェットコースターだけを楽しみに来ている子供だってたくさんいるんですから。それに見て下さい。あんなに行列が……」

窓の外には休日を楽しむ子供たちが、順番を待つのももどかしいように騒ぎ立てていた。

「ここは子供の日じゃなくても、日曜祭日ともなれば大人たちだって十分楽しめるようなアトラクションが数多く取り揃えてある、大規模な遊園地の制御室の中の出来事だった。

「子供の快樂なんて関係ない。俺の命の方が大事なんだ」

「どうしてジェットコースターとあなたの命が関係あるんですか。

乗ったら爆発でもするというんですか。もしかしたら、ジェットコースターに乗るのが怖いんじゃない……」

「ばかやろう！ つべこべ言わずに早く止める！」

殺し屋は詰め寄って、管理人のこめかみに拳銃を突き立てた。本当に引き金を引いてしまいそうな迫真に満ちた顔が、管理人の思考回路を麻痺させた。

「わ、分かりました！ でも、ちょっと待って下さい。止めるため

には手続きが必要なんです。今からそれを……」

管理人といえども勝手に機材を触ってはいけないし、運営を管理するだけで、正常な動静を左右することなんか出来るはずがなかった。

そこで遊園地の園長に承諾を得ようと、電話機に手を伸ばそうとすると、

「ちょっと待て！ スイッチはそこにあるはずだ、それを切るだけでいいんだ。 さあ、じじい。スイッチが先か、頭に穴が空くのが先か……」

殺し屋は拳銃の引き金に、ゆっくりと指を差し込んだ。

「き、切ります！ 止めればいいんでしょう。私がクビになったら、責任取って下さいよ……」

管理人が汗を拭きながらスイッチに手を伸ばすのを見て、殺し屋は安堵の溜息を漏らしていた。

彼の名は、殺し屋恭史郎。誰も知らない裏組織である殺人集団の一員だ。

今まで数多くの殺人事件が未解決のまま放置されているが、ほとんどの場合、迷宮入りになるような事件はこの殺人集団、 キューピットグループ の仕業なのだ。

そもそも彼が殺し屋になったのは、高校を卒業して間もない、ある企業の新人社員として社会の波にもまれ始めた頃の事だった。仕事といっても二十歳前の若者にとっては、青春を謳歌するためのガソリンが満タンになっている状態で、営業成績よりも色恋の成績の方が重要なときだ。

そんなときに表れた絶世の美女。恭史郎が本気で惚れたのは、たぶんこの女、晴美が初めてだろう。まるで強力な磁石がお互いを引き合うように、二人の愛は急激に高まるうとしていた。

が、世の中そんなに甘くない。

「私、あなたが好き、愛してるわ。でも……私、あなたの女にはな

れないの」

オフィス街のあるビルのロビーで、晴美の声が恭史郎にとって悲しく響いている。二人は今までここでしか会うことが出来なかったのだ。

「どうして？ 君には恋人がいるのかい」

「そうじゃないの。私、どうしてもやらなければいけない仕事があるんだ。それをやらなかったら……」

晴美は今にも泣きそうな表情で、恭史郎にすがりつこうとしていた。しかし、晴美がいう仕事を全うしない限り、どうしても飛び込めない事情があるらしい。

「仕事って……。僕に出来ることだったら、何でも言ってくれ。」

掃除、洗濯？ それとも、アイロンがけなら任せてくれ。家庭科の成績は、いつも（５）だったんだよ、僕！ 料理なんか大の得意で……」

他に自慢することがない程、家庭科以外の成績は哀れなものだった。よくぞ高校を卒業することが出来たものだ。

「実は私、ある秘密の組織に入ってる、その許しがなかったら、結婚だって……」

「秘密の組織？」

「たとえデートするだけでも、その仕事を終わらせないと出来ないの。もし、あなたがそれをやってくれたら、私はあなたの……」

晴美は潤ませた目を、恭史郎から逸らさずにいられなかった。

「君のためなら何だってやるよ。お願いだからその仕事、僕にやらせてくれないか」

哀願する恭史郎の声を聞きながら、しばらく口を閉ざしたままうつむいていた晴美は、何かを吹っ切るように顔を上げた。そして、

「あなた、人を殺したことがある？」

「殺し？……」

恭史郎は晴美の意外な言葉に動揺していた。さっぱりわけが分か

らない。

「あなた、私のこと愛してる？」

「も、もちろん！ 君がいない世の中なんて、僕には考えられないんだ」

「だったら……。私について来て」

晴美はそう言って、そのビルの地下室の下、そう、まだ誰も知らない秘密の場所へと導いて行ったのである。

地下の地下、といえば、暗くてジメジメとした息の詰まりそうな雰囲気を想像するが、ドアが開いたその場所は、まるで一流ホテルのロビーをそのまま持って来たような明るい空間が広がっていた。ビルを見ただけでは想像出来ないほどのそのフロアには、老若男女を問わず、様々な人達が楽しそうに談笑している。

ただ地上の世界と違うことは、そこにいる人達が、ナイフやピストル、ロープに機関銃、手榴弾やダイナマイトなどを手に持った、異様な雰囲気の世界が広がっていたのである。

恭史郎の前を歩く晴美の姿は、いつもと違う華やかさ、というより威厳といってもいい程の空気が放出されていた。

しかし、怖いということはない。凶器を持っている人波の中を歩いていても、その人たちの顔は一般人と変わらない優しそうな表情を浮かべ、至福の限りを尽くした極楽の世界の様相を湛えていたからである。

「は、晴美ちゃん……。ここは、一体……」

「しっ！ 今は喋ったらダメ！」

晴美はピシヤリと遮った。「あなた、私を愛してるのよね」

「も、もちろん」

「あの人たちに聞かれたら、何もかもおしまいなの。今から面接があるわ。いいこと、ただ『はい』とだけ言ってればいいからね」「う、うん……。でも、面接って……」

恭史郎は何がなんだか分からないまま、回りの視線を一身に浴び

た晴美の後ろを、ただ黙々とついて行くしかなかった。

悠然と闊歩する晴美に、冷やかしても妬みとも取れる声が、あちこちから飛び交っている。

「晴美ちゃん！ どうしたんだよ、男なんか連れて」

「裏切りっこなしだぜ。ちゃんと約束事があるんだからな」

と、そこまではよかったが、

「そんなひ弱な男に、QGの偉業を達成できるのかな。フフッ」

怖いお兄さんであれば分かりやすいものだが、どこかの交響楽団でバイオリンでも弾いていそうな堅物な青年がそう言ったから、余計にわけが分からなくなってきた。

QGとは、>キューピットグループ<の略称だ。殺し屋の組織にふさわしくない名称だとは思うが、この団体が世間の目に触れたとき、少しなりとも悟られてはいけないという思いから、会員の投票によって可愛げのあるこの名称に決められたのである。

自分に降り注ぐ視線を感じながら、恭史郎はおぼつかない足を進めていた。

パーティ会場のような広間を通り過ぎて、細長い廊下の突き当たりのドアの前にたどり着いた恭史郎に、いつもと変わらない晴美の笑顔が飛び込んで来た。

「さあ、着いたわよ。心の準備は出来た？」

「う、うん……？」

心の準備って、何を準備すればいいんだろう。とりあえず晴美の前だ、そう返事をするしかない。

「いいわね、ただ『はい』とだけ言うのよ、分かった？ 私のためなら、何だってやってくれるのよね！」

晴美の声は、恭史郎に有無を言わせぬ迫力がある。

「も、もちろん、君のためなら……」

「さあ、行くわよ！」

しかしてドアは開けられた。

その部屋は、普通の会社の応接室と何ら変わらぬ至って平凡な個

室になっている。来客用のソファとテーブルが一对。事務用と思われる安っぽい机に、訳の分からぬ本が並べられた棚が雑然と置いてあるだけだ。

ただ普通と違うことは、机に向かって怪しげな本に夢中になっている頭のハゲた親父のいやらしい目付きだけである。部屋に入った晴美を見たその目は、カマボコを逆さにしたようないやらしい形になっていた。

「会長！ 新人です、面接をお願いします！」

「ほほう、またまた来たのかね。いつも最初の意気込みは立派なものだが、この仕事をこなせる人は今までいないしね。大丈夫かな……」

会長と呼ばれたその男は、足元から頭まで舐め回すようにして恭史郎に視線を集中させた。ちよつと見ただけではそこら辺にいるスケベオヤジと何ら変わらない。

恭史郎は場違いな雰囲気飲まれまいと、両足を踏ん張ってハゲオヤジを見返していた。

「お願いします。早く面接を……」

そういつた晴美は、パイプ椅子を持ってきて恭史郎に視線を送った。頑張って、とても言っているのだろうが、恭史郎は全く分かっていない。

「じゃ、そこに座って……」

言われるままに腰を下ろした恭史郎は、どこを見ていいのか分からずキョロキョロと視線を動かしていた。

「ええと、名前は……？」

「恭史郎さんです。もちろん本名じゃありませんが」

横から晴美が言った。

「恭史郎ねえ。いつからこの名前を？」

「今です。今、私がつけました。ピッタリでしょ、彼に」

晴美は眼を輝かせて、恭史郎を見てニッコリとほほ笑んだ。

「分かった分かった。晴美君はもういいから、彼と話をさせてくれ

ないか」

会長はそう言って、恭史郎に問いかけた。「君はこの会がどういうものか知ってて来たんだろうね」

「はあ……」

知ってるはずがない。晴美の手前、そう言うしかないのだ。

「だったら訊くが、君は今まで何かを殺したことがあるか。もちろん人間とは言わない、小動物や虫の類いでもいい。殺しについての君の意見が聞きたい」

「はあ……」

そう言われても、「殺し」という言葉を聞いただけでも卒倒してしまいそんな気の弱い性格なのだ。今まで何かを殺したことがあるのだろうか。

恭史郎は、あまり能率のよくない思考コンピューターを始動させてみたが、

「小さい動物だったら殺せるかもしれませんが。ハエや蚊はもちろん、ゴキブリなら二センチ以下だったら殺したことがあります。それ以上になると、ちょっと……」

「二センチ以上だったら殺せないのかね。それはどうしてかな？」

「だって、怖いじゃないですか。真っ黒い体で羽をブンブン鳴らして飛んでくることもあるんですから。それを潰したら、グチャ！　っていう音が感覚として僕の体に伝わりますよね。あれがどうにも気色悪い……」

恭史郎がそう言った矢先、足元を五センチはあろうかというゴキブリが横切って行った。

「ひえっ！」

おもわず飛び上がった恭史郎を、晴美が慌てて押さえ付けた。

「我慢するのよ、恭ちゃん！」

「恭ちゃん？」

そんなふうに使われたのは初めてだ。もちろんこの名前だって、いま晴美が命名したばかりなのだ。

恭史郎は何がなんだか分からないまま、パイプ椅子に再び座っていた。

「まあいい、まあいいだろう。君にもある程度分かっているとは思うが、ここは殺人者たちの集団だ。人を殺すために、日夜訓練しているんだよ」

「は、はい……」

「もちろん、手当たり次第に殺すんじゃない。殺人を依頼した人の話と、殺される人の現状を確かめたうえで、どうしても殺さなければいけないと私が判断したときに、初めて会員たちに殺人を依頼するんだよ」

会長はそう言いながら、さっきまで見ていた怪しげな本の端を折りたたんでから、引き出しの中にしまった。

「会長、それ……」

晴美は見た。端を折りたたんだページには、モザイクのかかっていないアレがドアップに映し出されていたのである。俗に言うエロ本だ。

「いや、これは……新しい殺人の方法を考えていたんだよ。その……参考資料にと思ってね……」

タジタジとなって、会長は再び恭史郎に向き直った。

「とにかく、殺人者として君の性格は合格点を上げてもいい」

「へっ……。だって、僕」

「ここにいる人たちはね、みんな気の弱い性格の人ばかりだったんだよ。小さな虫しか殺せない。ちよつと怪我するとすぐ泣いてしまう。だからこそ、人間を殺すということが感覚的に分からないんだ。もちろんグチャッと潰すわけじゃないからね」

「でも警察は……」

「そこを上手くかわすのが、プロの殺し屋だ。大丈夫、君には素質がある。晴美君を好きなんだろう。君のものにしたいんじゃないのか」

そう言われて、恭史郎と晴美の視線が重なった。晴美は目を潤ま

せて喜んでいようだった。

「会長！ 恭史郎さんを会員にしてくれるんですよ！ 合格なんですよね！」

晴美はそう叫びながら恭史郎の胸に飛び込んで来た。

「ただし、ここに来たからには脱会はずできないよ、口外は無用だ」

「は、はあ……」

恭史郎は何とも答えようがない。まだ自分の置かれた立場を理解していないのだ。

「もしここを出た後に、この会のことを誰かに話すようなことがあれば、その時点で君の生命は終わりだ。いつでも君の命を奪うことは出来るんだからね」

「大丈夫です。恭史郎さんはそんな人じゃありません！」

晴美は恭史郎を庇いながら、会長に詰め寄った。

「分かった、分かったよ。 それでは、キューピットグループの規則と目標を説明しよう」

晴美に圧倒された会長は淡々と話し始めた。

「正当な（？）殺人の依頼があったときのみ、会員としての仕事をする。理不尽な殺人はしないこと。自分の感情で手を出さないこと。緻密な計画の元に行動すること。もし警察に疑われ、指名手配されたときは自害して果てること。団体のグループではあるが、一歩外に出たらあくまでも個人である事を忘れてはならないこと。成功報酬は、プロ野球の一流選手の年俸に等しい額であること。」

そして……。

「君は晴美君と交際をしたい、デートをしたい、あわよくば結婚もしたいと思っているようだな」

「も、もちろんです。そのために僕は……」

「晴美君は、この組織に管理されているんだ。彼女を自由にするためには、君たちに与えたノルマを達成しない限り不可能なんだよ」

「ノルマとは、一体……」

やっと晴美の話になって、恭史郎は目が覚めたように訊いた。

「百人斬り！　これは当初、晴美君に与えたノルマだったんだが、やはり彼女は女の子だ。男だつてなかなか無理だろう。そこでノルマを達成した勇氣ある者に、晴美君を託そうということなんだよ」

「ひゃ、百人……！」

恭史郎は呆然と呟いた。ゴキブリも殺せない自分が、百人も殺せるわけがない。

「恭ちゃん、頑張つて！　殺し方は私が教えてあげるから！」

晴美の輝いた目が、恭史郎を一流の殺人道へと誘おうとしていたのである。

後編

それからの恭史郎の生活は一変した。初めて持った拳銃、ナイフや日本刀、ましてや機関銃やダイナマイトなど、もちろん他人には見られてはいけないし、殺人の練習なんかできるはずもない。

それでも新人ということもあって、初歩的な殺人の依頼が恭史郎に回されていた。もちろん殺人に初歩もベテランもないのだが……。

しかし、一人殺し、二人殺し　それが十人目になったとき、恭史郎は恐怖どころか快感さえおぼえて来たのだ。

恭史郎は勉強した。あらゆる本や哲学書、心理学や推理小説の類いも読みあさって、殺人の何たるかを学んだ。それもすべて、晴美のためなのである。

幾日が過ぎて、QGの事務所で久しぶりに晴美に会うことが出来た恭史郎に、思わぬ言葉が耳に飛び込んで来た。

「頑張ってるようだね、恭史郎君！　ノルマ達成までもう少しじゃないか！」

会長の感激した言葉だった。百人斬りまであと十人。百人どころか一人も殺せない会員たちばかりなのだ。

「恭ちゃん！　もう少しよ、頑張って！」

恭史郎は笑っていた。もう何も怖いことはない。晴美との幸せな日々が始まる寸前なのだ。

「ところで、ノルマ達成の暁には、派手な祝賀会をやるうと思ってるんだ。もちろん君もQGは卒業だ。普通の人間に戻れるし、これ以上、人を殺さなくてもいいんだよ。そしてめでたく晴美君と結婚する。そのための祝賀会だ」

「そんな……慣れて来れば簡単なものですよ。祝賀会なんて……。僕は晴美ちゃんとデートさえ出来ればそれでいいんです」

ここまで成績が上がってくると、恭史郎としても自分の成績にの

ぼせ上がって来るころだ。今まで百人斬りを達成したメンバーはいないし、まさかここまで殺せるとは恭史郎自身も思っていなかったのである。

「ところで、君のノルマも来週中には達成できると思うんだ」

「はあ……」

「そこで、念願の初デートの予定は、晴美君に決めてもらおうと思っ
っている」

会長はそう言っ
て晴美に視線を送ると、晴美はスケジュール表
と思われる怪しげなノートに笑顔でペンを走らせていた。フンフン
と鼻歌などを歌いながら文末にハートマークを書いた晴美は、恭史
郎が横に立っ
ているのに気がついて、

「恭ちゃん！ 見てみて、初デートの場所を決めたの！」

と言っ
てはしゃいでいる。 そのあどけなさは、数十人の命を
奪った恐ろしい殺し屋の顔ではなかった。一体どんな顔をして殺し
ているのか想像もできないほど、可愛らしい女の子である。人は見
かけによらず、と言っ
うが……。

恭史郎がノートを覗いてみると、

「……遊園地？」

「そうなの。QGにはお世話になっ
てるから、会の慰安旅行も兼ね
てみんなで行こうと思っ
てるの。どう、名案でしょう！」

てつきり二人だけのデートが楽しめると思っ
ていた恭史郎は、そ
の提案に少しだけガツカリした。しかし、それ以上に恭史郎を悩ま
せる大事なことがあるのだ。

「晴美君の提案はすばらしい！ 私も会員のために何かしようと思
えていたところなんだよ」

会長は素直に喜んで
いる。

「私ね、恭史郎さんとジェットコースターに乗りたいの。スピード
も高さも日本一っ
てというのが出来たんだっ
て、あの遊園地に」

ほら来た！ 恭史郎が恐れていた事はこれなのだ！。

「恭ちゃん！ 一緒に乗っ
てくれるわよね」

「も、もちろん……ふふっ……」

恭史郎の顔が歪んでいる。殺人にはなれてきた恭史郎だが、直らないのが高所恐怖症、そして落下するときのゾクツとする感覚。あの、お尻の穴から内臓が飛び出しそうな感覚がどうしても耐えられないのである。

今まで苦い経験ばかりだ。小学校の遠足で行った遊園地のジェットコースターに乗ったとき、終着点から降りられないのは恭史郎だけだった。それもそのはず、恐怖のあまり漏らしてしまったのはおしっこだけではなかったのだ。それ以来、決してジェットコースターに乗るようなことはなかったのである。

「今やQ.Gのメンバーも若い人たちが多くなっているからね、みんなも喜ぶだろう。ジェットコースターも貸し切りで、みんなで乗るってのはどうだ」

会長はまるで童心に帰ったようだ。

「賛成！ 私と恭史郎さんは一番前に乗ってもいいかなあ」

「もちろんだとも。君たちが主役だ」

「それとも……やっぱり最後部がいいかなあ。体が浮き上がるようになるでしょ、あれが快感なのよ。楽しみだわあ！」

恭史郎はその会話に参加できない。男としてのメンツ、そして成績優秀な殺し屋として、怖いからやめてくれ、などとは晴美の手前、死んでも言えないのだ。

「とにかく、五月五日の子供の日に予定してある。それまでにはノルマも達成しているだろう」

「ちよつと待つてください。あと一週間しかないでしょ」

恭史郎は慌てた。

「大丈夫だ。三日後に、十人まとめたの殺人依頼が来ているんだよ。ある小さな会社の慰安旅行があるから、そこを殺つてくれ。なに、そいつらが死んだって、社会の秩序が乱れるわけじゃない。安心して行動してくれ。それでちょうど百人目だ！」

会長は高笑いしていた。恭史郎は殺人成功率百パーセントなのだ。

恭史郎が震えているのには誰も気づかず、会員たちは遊園地のアトラクションの話で盛り上がっていた。

何と皮肉なものだろう。今回の殺人はわざと失敗したふりをして、遊園地行きを引き延ばそうとしていたのだが、たまたま十人の会社員が乗ったマイクロバスが、運転手のミスで崖から転落してしまっただのだ。もちろん全員即死。

新聞の社会面では、運転手が突然心臓マヒを起こしたための事故死として取り扱われたが、QGのメンバーは、誰しもが恭史郎の見事な集団殺人の荣誉ある報道としてみていたのである。

もちろん恭史郎は、QGの事務所には報告しなかった。その日が過ぎるまで、しばらく自分のマンションに閉じこもろうとしていたのである。

が……。

「おはよう！ まだ寝てるの？ みんな待ってるわよ、早く行こうよー！」

遠くから聞こえる鶏の鳴き声と共に、晴美の元気な声が、ドアの新聞の差し込み口から響いていた。

ここは返事をしない方がいい。居留守を決め込むんだ。その内あきらめて帰るだろう。

と思いきや、

「ちよっと、早く起きて！」

いつの間にか晴美が恭史郎の体を揺さぶっていた。

だてや酔狂で殺し屋をやっているわけじゃない。鍵のかかった部屋に入ることなんか朝飯前なのだ。

「今日から一般人なのよ。もう殺さなくていいんだから。安心して起きなさい」

「う、ごめん。タベ徹マンで……」

と言い訳しても、万事休す。恭史郎はしぶしぶ起き上がった。もう、行くしかないのである、恐怖のジェットコースターがある遊園

地に……。

「じじい！ 本当に動かないんだらうな」

「大丈夫です。場内放送で機械が故障したと言わせますから」

「本当だらうな」

「信用してください。ですから、私の命だけは……」

「もし、妙な動きがあったら、いつでもお前の命は狙えるんだからな」

殺し屋が拳銃をしまい込むのを見て、管理人はその場に座り込んだ。

ここまで来てしまった以上、晴美の手前怖いとはいえなかった恭史郎は、こうするより他になかったのだ。殺し屋の性として……。

電気系統の故障により、すべてのジェットコースターの運行は中止いたします

行列の中に戻ろうとした恭史郎は、場内のアナウンスを聞いてニヤリと笑った。

「ちよつと恭ちゃん、何してたのよ。ジェットコースター、動かないんだって」

かれこれ一時間以上も並んでいた晴美が、不服そうな顔で愚痴った。

「何だ、残念だなあ。楽しみにしてたのに」

と言った恭史郎の顔は笑っている。

「誰かのいたずらじゃないのかしら。ジェットコースターに乗るのが怖い、小心者の男とかさ」

恭史郎はギクリとしたが、まだ誰も知らないはずだ。

「う、うん」

「情けないわよね、男のくせに。そんな男って大嫌い！」

声を失った恭史郎だが、相変わらずジェットコースターが動き出す気配はなく安心していた。

と、向こうから会長が走ってくるのが見えた。何やらニコニコ笑っている。

「晴美ちゃん、残念だったなあ」

と、会長が言えば、

「仕方ないですよ。メリーゴーランドにでも乗りましょうか」

と、恭史郎は嬉しそうに言った。

遊園地の案内マップを見ていた晴美が、納得したように頷いて、

「いいものがあるわ、私が案内してあげる」

そう言っつてQGグループを導いていった所に、高くそびえ立つアトラクションが存在していた。

恭史郎の顔がしだいに蒼くなってきた。こんなはずじゃなかった。そこはジェットコースターではないため、運行を中止することなく元気に稼動していた。

「さあ、行きましょう！ スリルがあつて楽しいわよ、きつと！」

恭史郎は忘れていた。ジェットコースターばかりに気をとられ、もつと恐ろしいフリーフォールがここにある事を見逃していたのである。

「ちよ、ちよつと……」

言葉もはつきり出ないまま、恭史郎の体はずるずると引きずられるようにフリーフォールの乗せられていた。

「こ、これもジェットコースターの仲間なんじゃないのか！」

「あら、そうよ。スリルがあるつて事に関してはね。 さあ、私たちの番よ！」

晴美と会長に促され、恭史郎はフリーフォールのシートのあつという間に縛り付けられた。

発車のベルの音がして、ゆっくりと上昇し始めた。 これも一

緒に止めればよかつたじゃないか！ 気の利かねえじじいめ！

恭史郎はそんなことしか考えられず、気がつけばはるか遠くの島が見えそうな最高地点で静止した。

今にもケツの穴から内臓が……！！

「じじい！ 地上に着いたら殺してやる！」

そう叫んだ恭史郎は、落下していく宙空の中で、晴美にだけは見せたくなかったあられもない姿をさらけ出していた……。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3448p/>

101回目の殺人

2010年12月16日10時10分発行